

夏堀 正元（なつぼり・まさもと）

1、プロフィール

小説家。記者出身の作家にふさわしく、戦後社会の歪んだ組織と人間性喪失の主題を、精力的に追求した『罨(わな)』『豚とミサイル』などに社会派としての本領を示す。

<生没>

1925(大正 14)年1月 30 日 ~ 1999(平成 11)年1月4日

<代表作>

小説『罨(わな)』『愛の傷み』『蝕まれた愛』『目覚めし人ありて』

<青森との関わり>

父は三戸郡福地村出身、初の公選八戸市長。正元は八戸中学校に在学した。

2、作家解説

父は三戸郡福地村出身の判事で、夏堀正元は、父の小樽地方裁判所在職中に生まれた。大正 12 年小樽中学校に入学、14 年八戸中学校に転入学、16 年同校を中央大学予科入学のために、4年修了をもって中退している。

父は、18 年八戸で弁護士を開業、21 年には初の公選市長となる。

19 年早稲田大学国文科入学、戦中軍役に服した後、復員して大学に戻るが、25 年中退。北海道新聞東京支社に入り、29 年まで勤務しながら、創作や評論に多彩な活躍をする。

31 年「呪文脱出」(「新潮」)でデビュー。35 年下山事件に取材した、長編小説『罨(わな)』を刊行、荒正人、野間宏らに評価される。36 年〈占領〉と〈地方政治〉と〈家〉の連動する世相の中での男女の愛を描いた『愛の傷み』を刊行。

38 年雑誌「新婦人」に一年間連載した「蝕まれた愛」は、人間心理と表現行為にメスを入れた作品。45 年短篇「幻の北海道共和国」(原題「囚人共和国」、短編集

『幻の北海道共和国』所収)は、安藤昌益思想の影響を受け、榎本武揚の変節を罵倒する硬骨漢を描いた。

戦後社会の歪み、組織間の矛盾、人間性喪失といった、すぐれて現代的主観を執拗に描いた作品を精力的に発表し、その反サロンの、民衆指向が評価されている。

3、資料紹介

○『戊辰の果て』

図書

1965(昭和 54)年5月 30 日

195mm×133mm

短編集『とんからりん』所収。戊辰戦争時の野辺地戦争大概記である。官軍応援に駆けつけた、軍艦陽春丸の野辺地砲撃、野辺地口での津軽・南部両藩の衝突と勝敗の模様。戦後、新政府による盛岡・八戸両藩処分の状況など手堅くまとめた短篇歴史小説。